

# 文学の地で彩る跡綴

## 跡綴（せきとじ）

日本では初めての書類として、古事記が誕生した。その後書物には娯楽としての役割が与えられ、現代も小説として多くの人に楽しまれている。

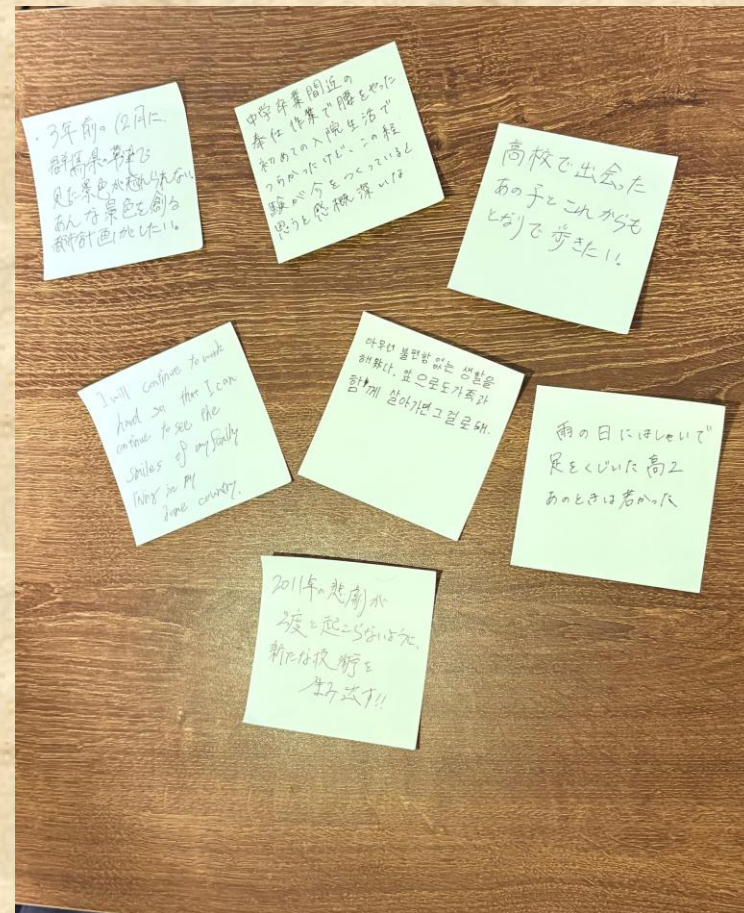
静岡県熱海市には起雲閣という建物があり、大正時代の作家達の別荘として文学の発展を支えてきた。私はこの近くで先人達と同様に自らの歩んできた“跡”を自らの手で“綴る”ことでこれからの生活を手助けすることできる喫茶店のような空間を提供する

熱海の自然に触れながら、一人で過去を振り返ったり、ある人と会話を交えたりしながら、決まりのない自由につづる。この自分を振り返り、未来につづる。これが私の考える「新しい和」である“跡綴”だ。

この跡綴の舞台となる場所の設計地として起雲閣の南に位置する駐車場の一部を本建築に使用する。（赤色の部分）



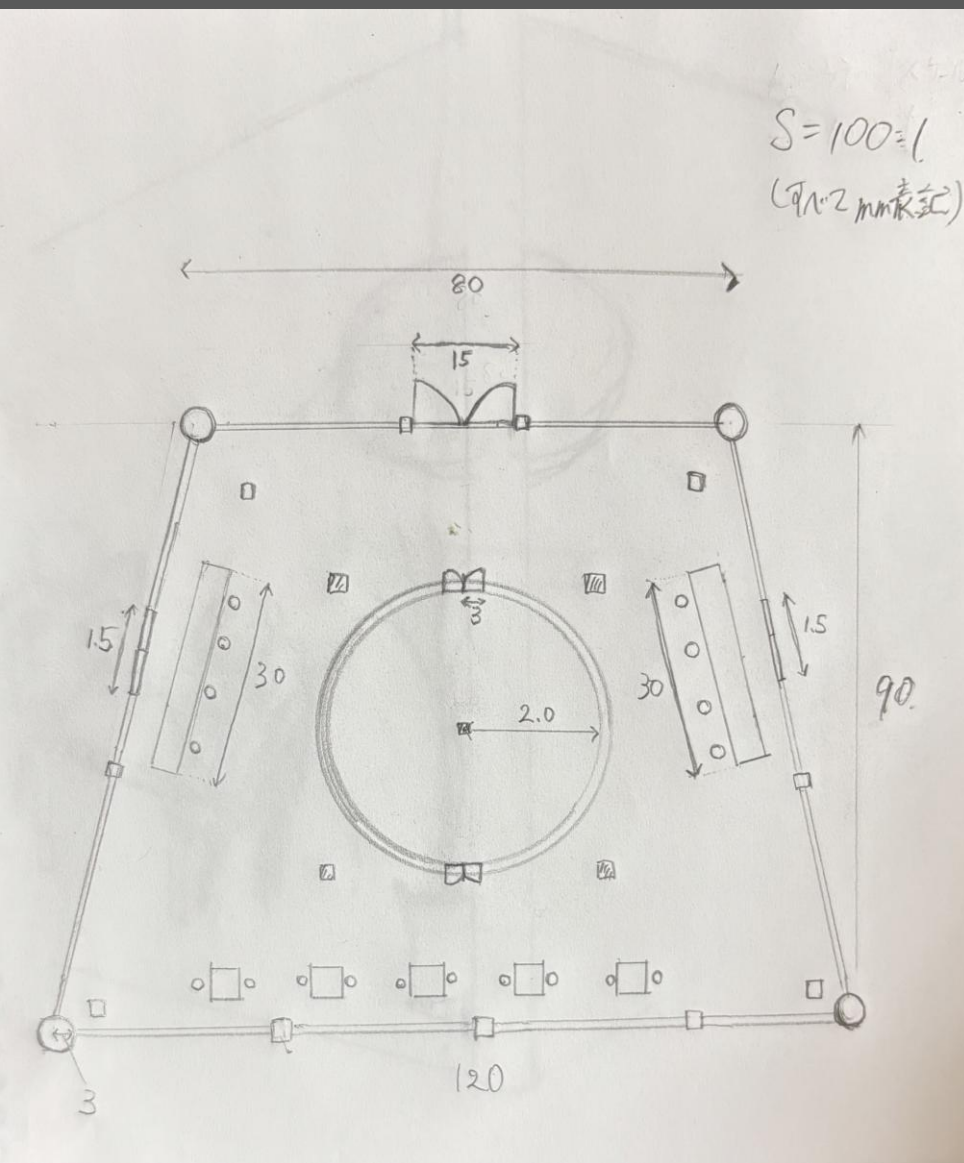
今回の提案ではゆったりとした時間を過ごせる空間に訪れた人々1本のペンと1枚の付箋を渡し、自由に書いてもらったものをボードに貼ってもらう。そうすることで、小説家のような普段から言葉を書き出すような行為を外国人にも経験してもらい、日本の立派な文化である文学を後世に残していく。



上の写真のように様々な言語で各々の想いを自分の手で書いていく。これがどんどん増えていき、新たな“跡”ができる。

# とれいす

今回の建築の建物の名前は“とれいす”であり、人々がゆったりとした時間を過ごすための空間として活躍する。中央の円形の場所が飲食物の提供場所になり、そこで受けとった付箋とペンで自由に言葉を綴っていく。



定員は18人であり、完全予約制として、付箋だけでなく、新たな小説家の別荘のような役割も果たしてくれることだろう。

北に位置する扉の先には円形のカウンターが待ち、さらに奥には一面ガラス張りの席が待っている。

イラストのように付箋が増えていく